

## 三重の俳人

俳句というと、すぐに思いうかぶ人物として松尾芭蕉まつお ばしやうがあげられます。芭蕉は、今から三五〇年ほど前（江戸時代）、伊賀上野に生まれました。伊賀上野の侍大将だった藤堂新七郎家とうどうしんひちろうけに仕え、そのころから俳句の勉強を始めたようです。後に、江戸（今の東京）に出て、本格的な俳人（専門的に俳句を作る人）としての道を進むことになりました。そして、五十一才で亡くなるまでに、それまでは、おかしさやこっけいさをよんだものであった俳句（当時は俳諧はいかいと呼ばれていました）を芸術性の高いものとするとともに、多くの弟子を育てました。また、日本の各地を旅して、俳句を広めました。有名な「奥の細道」は、芭蕉が紀行文（旅の見聞や印象を綴ったもの）として残したものの一つです。まさに、松尾芭蕉は三重県が生んだ日本を代表する俳人であるといえます。また、松尾芭蕉の句を刻んだ句碑は全国各地に見られますが、県下にも多くの句碑が建てられ、人々に芭蕉をしのばせています。今も上野市や伊賀町では、毎年、芭蕉を記念するもよおしが行われ、世界の各地から俳句が寄せられています。



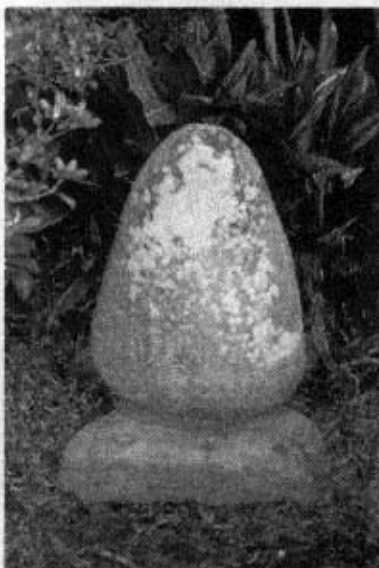
からかきにおし分見たる柳哉やなぎの

（阿山郡大山田村須原 大橋たもと）



蓬萊ほうらいにきかはや伊勢の初だより

（津市大門町 大宝院内）



雁かりゆくかたやしろ子若松

（鈴鹿市中若松町 緑芳寺境内）

※発句に続けてよむ付句の句碑で、芭蕉の句碑としてはめずらしいものです。

ところで、三重県が俳句の発展に大きく関わっているのは、芭蕉がいたからだけではありません。芭蕉が登場するさらに一〇〇年以上も前（室町時代）、まだ、俳句が独立したものでなく、連歌（句を連ねていくもの）の中の遊びの一種として、主に、貴族や武士と呼ばれる人たちの間で流行していた頃、伊勢神宮の神官であった荒木田守武は「守武千句」で俳句を文芸として価値の高いものとなりました。江戸時代になると、伊勢の地は、神宮参拝に訪れる人たちで、人の行き来が盛んになり、中央の文化が流れ込み、文化の水準も高まって、文化発信の地になっていったと考えられます。こうして、守武以来の伊勢俳句もその後の俳句の歴史に大きな影響を与えました。芭蕉も伊勢俳句に心をひかれていました。芭蕉が亡くなると、俳句は芭蕉風のものを中心となり、三重県の各地でいろいろな人々が芭蕉風の俳句を受けつぎました。



荒木田守武



松尾芭蕉

松尾芭蕉・荒木田守武の絵は（康工編「俳諧百一集」）という本にかかれています。

桑名の雲裡坊杉夫、四日市の西村馬曹・燕説、神戸城主であった鈴鹿の本多清秋、津の二日坊宗雨、松阪の森川滄波、伊勢の岩田涼菟・中川乙由・三浦栲良など三重県では有名な俳人たちが生まれ、たくさんのおおさんのすぐれた俳句を作りました。なお、松阪の大淀三千風は芭蕉と同時代の俳人で、芭蕉とはちがう、古風な俳句を作って有名になりました。